

## ニーチェと自然主義との距離

——和辻哲郎『ニーチェ研究』を手掛かりとして——

飯田 明日美

はじめに

ニーチェの「力への意志」をいかに理解するかは、ニーチェ研究史において常に争点となってきた。その中でも、特に後世の研究に多大な影響を及ぼしてきたのが、ハイデッガーが提示した解釈である。ハイデッガーは、ニーチェをデカルトから始まる西洋近世形而上学の完成者と規定する。この形而上学は、人間を「主体として全ての存在者の根底に横たわるもの」として想定する。ハイデッガーはさらに、ニーチェの哲学を逆転したプラトニズムとも述べる。プラトンがイデアを真の存在と考えたように、ニーチェは身体としての「力への意志」を真の存在としている。このハイデッガーによる批判はニーチェ哲学、特に「力への意志」を考察する時には未だ応答を迫られる課題である。

さて、近年英語圏で看過できないほどの隆盛を見せるのが、ニーチェ哲学を自然主義的に理解する試みであり、この潮流を牽引するライターはニーチェをヒュームに並ぶような自然主義者であるとする<sup>②</sup>。その際、ライターは、クラークの解釈に依拠し、ニーチェを経験論者として捉え、ニーチェは感覚できることを真理とみなすため、真理とその表象という二元論は取つていないとする。クラークやライターの解釈は、ハイデッガーの批判に対する一定の解決を与えている。しかし、ニーチェの「力への意志」説を経験科学である心理学的考察として限定すること、<sup>③</sup>「力への意志」説が本来内包している二つの考察を捨象するように思われる。その一つは、経験を可能にする内的力動性に関する考察であり、もう一つは、コスモロジカルな原理としての考察である。本発表では、自然主義的理解の空隙とも言える、「力への意志」説の内的力動性と、コスモロジ

カルな側面に関して、和辻哲郎の『ニーチェ研究』における或る解釈が、ハイデッガーによる、伝統的形而上学との批判にも耐えうるものとして注目できることを提起したい。

## 一 ニーチェと方法論的自然主義

ライターやクラークによると、初期のニーチェは、感覚でできる世界である仮象の世界と、真理である物自体との間には乖離があるという認識論的立場を取っており、真理と仮象の間の相違や対応を問題にしていた。しかし『ツアラトウストラはこう言った』以降に見られる成熟期のニーチェによる認識論は、遠近法主義<sup>4</sup>に到達しており、それにより、真理と仮象の対応説は乗り越えられている。ニーチェは遠近法主義を採用することで、真理が経験的世界以外の真実の世界に由来するという考えや、経験的世界を仮象だとする対応説を放棄し、我々にとってはまだ一つ、感覚でできる経験的世界だけがある、と主張するに至った。つまりニーチェは、アプリアリナ知を介してのみ到達できる形而上学的な世界の問題を我々が持つということを、否定するに至ったのだ。例えば、ルサンチマンからキリスト教道徳が生じる過程を描いた『道徳の系譜学』においてニーチェは、方法論的自然主義者<sup>7</sup>として道徳現象の起源を明らかにしている。ニーチェはローマ時代の被制圧者が支配者に対して抱いた恨みの感情（ルサンチマン）という心理的機能に、キリスト教道徳の決定要因を見出している。つまりニーチェは、道徳等の

諸現象の因果的決定要因を、経験外の真理に求めるのではなく、観察可能な、人間の生理的・心理的事実の枠内で特定しようとしているのである。

ライターやクラークはこのように述べるが、ニーチェは遠近法主義を採用することで、自然主義的に道徳の起源を論じているという主張は妥当であろうか。確かに、『道徳の系譜学』で弱者のルサンチマンが道徳を生み出す過程をたどる中、ニーチェは道徳の起源を、我々人間の持つ復讐や憎悪といった感情に基づき説明している (Gaus, 2008)<sup>8</sup>。しかし、すべてを経験の枠内で説明をしているのかどうかについては、検討する必要があるだろう。ライターはヒュームとの類似点を指摘することで、ニーチェを自然主義者と規定するが、ヒュームの考察が則する方法論は、ニーチェよりも厳格である。ヒュームは、知覚を可能にする基本的な要素として、類似、近接という観念の結合作用を挙げるが、それら諸機能が働く理由や機能がある根拠については語らない。それらの機能については、「人間性に本来備わっている性質に属するのだ」とし、それ以上の考究はしない<sup>9</sup>。一方で、ニーチェは方法論的自然主義には相応しくない描写をする。例えば、ルサンチマンの道徳が利用する「主体の信仰」に関するニーチェの考察は「主体の信仰」を生じさせる内的働きに至るまで遡っている。そのため、ニーチェは観察可能な、人間の生理的・心理的事実の枠内で道徳の因果的決定要因を特定していると限定するのは難しいように思える。

それでは、ルサンチマンの道徳に関するニーチェの考察をたどってみよう。ニーチェによると、我々は、ある働きに對した時にその働きの「主体」を想定せざるをえないという信仰を持つ。

「雷が光る」とは、行為を二重にした表現である。それは、作用が作用するというようなものだ。雷という同じ一つの現象をまずその原因とみなして、次にはその作用とみなしているのである。自然科学者は「力が動かす、力が原因である」と語るとき、同じようなことをしている。……言葉の誘惑に負けているのであり、騙されて「主体」という〈偽物〉を押し付けられ、これを追い払うことができないではないか。(KSAS : 279-280)

光る活動に、主体、つまり生起とは異なる「持続し、存在し、生成することのない一つの存在」が付け加えられる。ルサンチマンの道徳もこの「主体の信仰」を利用してゐる。強者の背後に、中立的な主体があり、主体が「強さ」を發揮するかどうかを自由を選択しているとみなす。しかし、そういう主体は存在しない。「行為、作用、生成の背後には、いかなる「存在」もない」がルサンチマンの道徳は、「行為者」が自由に「強い」行為や「弱い」行為を選びとっているかのようにならざるを得ない。しかし、それは「主体の信仰」が生み出す観点からの誤解である。強さに対して、それが強く現れないようにするのは、矛盾である。「力のある量とは、まさにそれだけの量の衝動・

意志・作用である——というよりむしろ、そのように働き、意欲し、作用すること自体に他ならない。現実の世界とは、「力の作用」そのものなのである。このようにクラークやライターが方法的自然主義であるとみなす『道徳の系譜学』においてもニーチェは依然として、現象を遡り「力」が「作用」するだけの世界に関する言及をしているのである。

『道徳の系譜学』の一年前に刊行された『善悪の彼岸』には、力の作用がどのように生じるかという問題を仮説として提示している。「現実には〈与えられたもの〉としては、我々の欲望と情熱との世界以外に何もないと仮定するならば、また我々は我々の衝動の現実以外のいかなる他の〈現実〉へも下降することも上昇することもできないと仮定するならば、———というのも思考とは、これら衝動が相互に制約しあうことにすぎないから———、……その所与なるものは、機械的(あるいは(物質的))な世界をも理解するには充分でないのではないか」。ここで言う、機械的な世界というのは、表象や仮象ではなく、「我々の情動そのものももっているのと同じ實在性の段階に属するものとしての世界」だという。さらに、その世界は、「情動の世界のより原初的な形態」であり、「そこではまだ一切が強力な統一のもとに渾然とまとまっているものの、やがてそれが有機的過程をたどって分岐し発展して行く」ような、「生の先行形態」である(KSAS : 54-55)。ここでニーチェが考察しているのは、ある観点によって形成された表象ではなく、多数の衝動がうご

めきながら渾然一体となった形態である。渾然一体とした生の先行形態から、いかに表象が成立していくのかを考察する際に極めて重要となるのが、作用の内的力動性としての「力への意志」である。

〈作用〉が認められるところではどこでも意志が意志に作用しているのではないか——そしてあらゆる機械的な事象は、その中にある力がはたらいっている限り、それはまさに意志の力、意志の作用ではないか、という仮説。——かくして結局において我々の衝動的生の全体を、意志の唯一の根本形態——すなわち私の命題に従えば、力への意志——の発展的な形成および分岐とすることができたなら、……それによって我々はあらゆる作用する力を一義的に力への意志として規定する権利を手に入れたことになる。内部から観られた世界、この〈可想的性格〉に従って規定された特色付けられた世界、——これこそまさに〈力への意志〉なのであって、その他のなにものでもないだろう。(KS45: 20)

ここでニーチェは、「力への意志」という概念で、自らが生きていく「欲望と情熱との世界」の作用の原因となる内的力動性を規定している。衝動は、自己の力をより拡張すること、つまり、他の衝動を支配しようと意志することをその本質とするのである。「全ての衝動は支配欲に燃えて」おり、「自分こそが他の衝動の主人であることを示したがっている」(KS45: 20)。

このような内的力動性を、「力への意志」とニーチェは名づけるのである。それは、観察によって明らかにされた生理的・心理的要因ではない。〈可想的性格〉である〈力への意志〉という内的力動性を仮説として提示することで、あらゆる「機械的な事象」の作用の原因を規定しているのである。

さらにニーチェは、「生物は何よりもまずその力を発現しようとするのであり——生そのものが力への意志である——」(KS45: 27)と述べ、「力への意志」を有機的世界全体における力動性の原理とする。生や有機的世界全体の運動を貫く本質的な性格として、「力への意志」という力動性が提示されるのは、『道徳の系譜学』でも同様である。「能動的で、自発的で、支配を欲し、攻撃的で、新たな方向へと自らを推し進める諸力こそが、生命において優越した原理としてはたらいっている」。「有機界におけるあらゆる事象は、制圧であり、支配であり、この制圧や支配がすべて一つの新しい解釈、調整であり」、「生の本質とは力への意志にあるのだ」と描写されることからわかるように(KS45: 311-316)、「力への意志」はあらゆる生起における作用する力を一義的に定義する、ある種のコスモロジカルな原理でもあるのだ。

## 二 自然主義的理解の空隙と、 和辻哲郎の『ニイチェ研究』

クラークは、「力への意志」は心理学に属するものと捉えた

ほうが良いと考え、「力への意志」の持つ「コスモロジカル」な原理としての側面については、ニーチェはそれを真理としては捉えていないということ、また知識の問題とは考えていないという立場をとる。またライターは、ニーチェはあくまで経験的な領域、つまり観察できる事柄と、幾つかの単純な原理で議論を進めている。よって、「力への意志の形而上学的言説についてはニーチェが真剣にあるいは説得的な議論を展開していない」とする。

しかし、ニーチェ自身が「生物は何よりもまずその力を発現しようとするのであり——生そのものが『力への意志』である——」(KSAS:27)としようように、やはり「力への意志」はニーチェの思想の根幹にある概念である以上、「内側から見た世界」という際の方法論と、「作用を一義的に定義する原理」というコスモロジカルな側面についても、整合的に説明する必要があるのではないだろうか。管見の限りでは、これら二点は自然主義的理解の射程には入っていないようである。

「力への意志」を、現象に対する真の世界として把握してしまおうと、「対応説」、つまり「力への意志」という本体と、その解釈があるという説に逆行し、ハイデッガーの「近世主体性の形而上学の完成形」及び、「逆転したプラトニズム」という批判に耐ええないだろう。ニーチェ自身が「本体」と現象の差異に関して批判的であるため、「対応説」とは異なる形で、「内側から見た世界」及び、「コスモロジ」を理解することが肝

要だ。まさに、その解決策になりうる見解が、和辻の『ニイチェ研究』<sup>11)</sup>に含まれている。ニーチェ研究の場においては単に国内のニーチェ研究史の「コマ」として扱われるに止まっている『ニイチェ研究』であるが、「対応説」を回避しながら、「力への意志」の「内的説明」及び「コスモロジ」を整合的に理解できる見解が含まれており、その局面に関しては、自然主義的理解の勢力が強まる現代のニーチェ研究の場において見直すに値する議論だと考える。

それではまず、「力への意志」の特徴のうち、「内側から見た世界」という観点について和辻がどのように解釈しているか検討する。和辻は以下のように述べる。ニーチェはイギリス経験主義とカントの認識論の両者を融合させるために、「直接なる「経験」と「意識の主観を通して現れる意識的事実」とを区別し、我々が概念を使用する際、我々の根本にはいかなることが起りつつあるのかを直接に経験する必要があった。<sup>12)</sup>ニーチェが経験した、この直接なる経験を、和辻は「直覚」と呼んでいる。「直覚」とは、感覚や思惟に頼らずに何かを認識する「能力」を指すのではなく、主客の対立を絶する「感動」、「生命そのもの」として生きることである。<sup>13)</sup>ここで和辻が述べる、主客の対立を撥無した「感動」とはいかなる状態を指すのであろうか。和辻による説明は次の通りである。デカルトが「考える我」を直接に確実とした一方、ニーチェは「考える我」は表象として現れたものであり直接的ではないとした。我々の意識からあ

らゆる表象を洗い去るとしよう。その状態は虚無ではない。むしろ最も潑刺として活気にあふれた生の力の直接的活動が展開されている。意識の根底においては、こうした主客未分の諸力が活動しており、その活動は、感動において「力感」、「生命感」として感じられるのである。直接にあるのは、力感、活動であるが、デカルトの「我思う」は、この活動を、活動者とその活動とに分けて解釈する歪曲である。これら和辻の叙述から考えると、「直覚」とは、感覚や意識の奥底で「内より働く力」である「力への意志」<sup>(17)</sup>を、自己に内在する力として感動において感じ取ることであろう。それは対象化された客体を感じ覚することではなく、主客の対立を撥無した感動であり、「力への意志」を生きたという表現が最も適切な状態なのであろう。<sup>(18)</sup>

和辻の『ニーチェ研究』は、「力への意志」を、主体や客体を成立させる根本動力として検討し、「感覚」や「意識」成立以前の力の闘争を直接体験するような「直覚」というツール<sup>(19)</sup>を提示する。もちろん、このようにニーチェの「力への意志」について、現象を成立させる根本動力として理解することは、デカルト以来の主体性の形而上学の完成形だというハイデッガーのニーチェ批判にさらされる懸念がある。しかし和辻は、「力への意志」を、主体でも、客体でもない、多数の力の相争いとして理解している。和辻のニーチェ解釈においては、主体の価値付けにより、客体としての表象が配置されるといって構図は存在しない。むしろ、諸力が相争う過程で、「主体」と「客体」

とに分化発展していくのである。その意味で、近代の主体性の形而上学というハイデッガーのニーチェ批判とは異なるニーチェ像を、和辻は描き出していると言えよう。

次に、「力への意志」のコスモロジカルな側面に関する、和辻のニーチェ解釈をたどる。右記の通り、ニーチェは主客の対立を撥無した「直覚」により「力への意志」を生きたのであると和辻は述べるが、「直覚」によってニーチェは何をどのような把握したと、和辻は考えているのであろうか。時間の真相は「力への意志」であるとすると和辻の議論からその具体像をとり出したい。和辻のニーチェ論によれば、すべての活動は、今まさに自分が生きている「この瞬間」に結ばれており、「この瞬間」に内から湧き出でる「力への意志」のうちにある。<sup>(20)</sup>「力への意志」はこの瞬間の力感でありながら、且つ、あらゆる過去と未来の混融とも言える。なぜ和辻のニーチェ論では、「この瞬間」がすべての活動の結節点と言えるのか。それは和辻が、「力への意志」を、心理学的考察に限定せずに、世界のすべてを貫く潑刺とした活動原理として解釈しているからである。「力への意志」が世界全体を貫く原理である故に、「この瞬間」の活動は、世界におけるすべての活動へと伝播すると同時に、帰結でもあると考えられるのだ。和辻によると、人に解釈された世界の奥には深い現実があり、それは永久の生成、潑刺たる関係である。<sup>(21)</sup>「この現実が内より直覚せられる時——すなわち純粹に生きられる時——深いしかも確実な、微妙にしてしかも

激越な、躍如たる力として明らかにされる。これが「力への意志」と呼ばれるものである」と、和辻はまとめている。このように、「直覚」は「力への意志」を生きることである。そしてそれは、自分の内から湧き出でる一瞬の力が永久のすべての力と関係していることを理解するということであろう。和辻のニーチェ解釈において、世界を力の活動として理解することは、外側からの観察により活動者から活動者に対して受け渡される力を考察することではなく、「直覚」つまり、内側から力との関係を理解することである。そして、内側から理解することは、コスモロジカルな原理としての「力への意志」を理解することでもあるのだ。

このコスモロジカルな原理は、果たしてハイデッガーの批判する逆転したプラトニズムなのであろうか。和辻は、特殊と全体との関係で「力への意志」を説明しており、そこで提示された世界像は、「逆転したプラトニズム」とは言えない。和辻によると、「力への意志」は多様な「力の中心」として活動する。「力への意志」は特殊な「力の中心」として活動するが、一方で「力の中心」は「力への意志」の全体とも言える。この「力の中心」を和辻は、「個性」とも言い換えている。<sup>24</sup>「力への意志」の内部には、個性を異にした多数の「力の中心」があり、それぞれが自らの力の伸長に努めることで特殊を形成する。「力への意志」はこのように内部に抗争する多数の特殊を含む不断の流動である。例えば、人が何かを意志する際、意志の内には多

様な欲求や感情があるはずであるが、抗争の末に意識に上るのは、部分的に捨象されて、ある目的への意志という「力の中心」からなる特殊だけである。このように、ある「力の中心」が抗争の末に意志という特殊を形成する。しかし意志というのは一つの特異であり、その特殊が成立するためには、感情や欲求等、多数の「力の中心」との関係が成立していることも不可欠である。つまり、ある特殊は常に他のすべての特殊との関係の中で、成立しているのである。

力への意志は、多様を含まない普遍者として活動するのでなく、厳密に特殊な力として活動する。特殊な力を度外視した力への意志はない。<sup>25</sup>

このように、和辻は諸力の関係性としてニーチェのコスモロジを解釈しており、なおかつニーチェのコスモロジでは世界は様々な特殊として変化し続けるが、一つの全体として内的に閉ざされていることを指摘している。

「力への意志」は、「あらゆる特殊と対立を含んだもの」として絶対であり、それ自らには相対するものを持っていない。<sup>26</sup>また、「力への意志」はそれ自体で完結しており、総量として見れば一定しているが、その内部は常に活動しているため、「永久に自ら自己を創造し、破壊するもの」<sup>27</sup>なのである。このように、すべての特殊は、全体としての「力への意志」の内部の出来事である。特殊として生成流動する世界のすべては、「力への意志」の内部で起きていることなのである。和辻のニーチェ

論では、「力への意志＝本体」と「特殊＝現象」という分裂は見られず、特殊は全体の内部の出来事として理解されている。逆転したプラトニズムと批判されるような「力への意志」と仮象の二元論としてではなく、内的完結性を持った世界は、永遠に特殊を生成する運動であるということをも、「力への意志」のコスモロジーとして和辻は提示しているのである。

おわりに

和辻哲郎の『ニーチェ研究』は、「力への意志」の特徴である「内側から観た世界」と「コスモロジー」を検討するに際し、「直覚」というツールを提示することで、特殊を形成する諸力の関係性としての完結した世界という世界像を提示している。この和辻の見解によれば、主体性の形而上学、及び逆転したプラトニズムというハイデッガーのニーチェ批判は的確ではないだろう。最後になるが、和辻は、『ニーチェ研究』の中で、「直覚」を哲学者の領分として示している。世界に関する科学的見解の空隙を埋めるものとして、哲学や思想における「直覚」の役割を再検討することもまた必要であるかもしれない。

- (1) Heidegger, M., *Nietzsche I, II*. Pflüngen: Neske Verlag, 1961.
- (2) Leiter, B., *Nietzsche on Morality second edition*, New York: Routledge, 2015.
- (3) Clark, M., *Nietzsche on truth and philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

(4) ニーチェは「遠近法的な評価と仮象性とに基づかない限り生というものは全く存立しないだろう」(KSA 4: 53)と述べる。そして、仮象性を廃棄しようとするは、いわゆる「真理」として何一つ残らないのかし、この世界がフィクションであってはならない理由があるのか?と問う。ニーチェは世界を生が遠近法によって解釈した世界であると考えている。

(5) Clark, *op. cit.*, 1990, p.114.

(6) *ibid.*, p.117.

(7) 自然主義の定義は多様であるが、存在論的自然主義と、方法的自然主義という二つに大きく分類される。前者の存在論的自然主義とは、「何が」存在するのかに関する主張である。自然を超えたものの存在を認めないため、神や魂といった非自然的なものやスピリチュアルで自然世界を超える存在には懐疑的である。後者の方法的自然主義とは、存在を探索する際の方法論についての立場であり、「いかに」探索するかという手法についての区分である。

(8) ニーチェの引用は Nietzsche, F., *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe*, Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1967-77 に于き、以下 (KSA 巻数: 頁) と表記する。翻訳は主に白水社版ニーチェ全集を参考にしたが、部分的に筆者による訳語を用いた。

(9) Hume, D., *A treatise of Human Nature*, Oxford/New York, Oxford University Press, 2007, 1.1.4. (第一巻 第一章第四節)

(10) 力への意志の言説は、経験的な領域から生じており、人間のモチベーションについての考察に起源を持つ。心理学として捉えらる「力への意志」の目的は、効力の感覚を得ることになり、感覚できることこそが正しいというニーチェの立場と矛盾しない。

(11) 和辻の『ニーチェ研究』は一九一三年に刊行された和辻の処女作である。ハイデッガーが「力への意志」の形而上学としてニーチェ哲学を解釈した『ニーチェ』は、ハイデッガーの一九三〇年代以降の大学での講義をもとにしたものである。和辻はその講義よりも二

○年以上早い時点で「力への意志」を中心にニーチェ哲学を読み解いている。

(27) 同、一三八頁。

(いいだ・あすみ、ニーチェの哲学、お茶の水女子大学

博士後期課程)

- (12) 和辻の思想研究としては度々取り上げられている(大石紀一郎「和辻哲郎とニーチェ——日本におけるニーチェ受容史のために——」東大比較文学会編『比較文学研究四六卷』一九八四年、一—三五頁。頼住光子「和辻哲郎の思想における「かたち」の意義について——その成立と展開に関する比較思想的探求——」『講座比較思想 転換期の人間と思想 ②日本の思想を考える』北樹出版、一九九三年、二〇四—二二八頁。湯浅弘「和辻哲郎と生の哲学——『ニーチェ研究』を中心に——」『比較思想研究』二〇〇二年、六二—六九頁。鈴木貞美「和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観——ニーチェ研究をめぐって」『日本研究』第三八集、国際日本文化研究センター、二〇〇八年、三一五—三四八頁、他)。
- (13) 和辻哲郎『ニーチェ研究』『和辻哲郎全集 第一巻』岩波書店、一九六一年、五一頁。
- (14) 和辻、前掲書、四四頁。
- (15) 同、四一頁。
- (16) 同、五四—五六頁。
- (17) 和辻は「権力意志」という訳語を当てているが、本稿では「力への意志」に統一する。
- (18) 和辻、前掲書、五九頁、他。
- (19) 和辻は、直覚について認識のような能力のことを言うのではなく、生の充実のことだと述べる(同、四四頁)。
- (20) 同、七四頁。
- (21) 同、一〇八—一〇九頁。
- (22) 同、一〇九頁。
- (23) 同、一三八頁。
- (24) 同、一〇頁。
- (25) 同、一三八頁。
- (26) 同、一三九頁。